

研究員報告

龍谷大学所蔵の韓国撰述仏書の文献的意味

李 鍾 壽
(韓国 国立順天大学校 HK 教授)

1. はじめに

仏教文献は大きく経律論の經典類と各国で作られた撰述仏書等に分けて見ることができる。本考で取り扱う文献は撰述仏書であり、その中でも韓国撰述仏書である。韓国で撰述された仏書は新羅時代、高麗時代、朝鮮時代の仏書に区分をすることができるが、新羅時代の現存する仏書は総54種で、その中の46種は韓国に残っておらず、日本のみに存在している¹⁾。また、高麗時代の中には、一部も韓国には伝来しておらず、日本にのみ残っているものもある²⁾。

新羅時代撰述仏書の大部分は、旧統蔵経や大正新脩大蔵經に収録されており、高麗時代撰述仏書は『韓国仏教全書』に紹介されている。それでも、近代以前に刊写された原本に対する重要性が減少するわけではない。板刻された時代が違ったり、筆写された人物が異なる場合、文字の加減や時代によつての解釈方法に違いがあるため、文献の系統を把握して、時代別原本の研究が非常に重要になるためである。このような古文献については、日本所在の各図書館や寺刹文庫の目録を通して、全体的な所蔵現状を把握することができる。しかし、これまでこれに対する正確な統計を割り出すことはできていない。特に韓国の新羅時代仏教研究者達の大部分は、旧統蔵経や新脩大蔵經に依存しており、日本にだけ伝来されている近代以前の刊写本の現状に対して、総合的な検討をしていない。

幸いにも筆者は龍谷大学仏教学科の浅田正博先生の協力を得て、2013年に龍谷大学図書館に所蔵される韓国撰述仏教文献の調査をすることができた。そのため、日本に伝来された韓国撰述仏書を総合的に検討する第一歩を踏み出すことになった。本稿でその最初の試図として龍谷大学所蔵の韓国撰述仏書の現状と書誌的価値に対して論じ、今後の韓国仏教研究者達の助けになればと思う。

2. 韓国撰述仏書の種類

筆者が龍谷大学図書館で探し出した韓国撰述仏書は、新羅時代17種、高麗時代4種、朝鮮時代1種である。その中、新羅時代仏書の全体と高麗時代の『円宗文類』は日本にのみ伝来している仏書である。特に日本のみに伝来している新羅時代撰述仏書46種の中、17種が龍谷大学図書館に伝来しているため、日本伝来新羅時代撰述仏書の37%に当たる文献を龍谷大学が所蔵していることになる³⁾。従って、龍谷大学図書館は新羅時代撰述仏書の宝庫と言えるであろう。先に新羅時代撰述仏書17種の目録を示すと次の通りである。

種数	書名	撰者	版事項	発行事項	巻事項	龍谷大学請求番号
1	仁王経疏	円測	筆写本	発行地・発行者不明, 延亨元年(1744)跋	卷上中下 (4冊)	241.2/39_W/1-4
2_1	解深密経疏	円測	筆写本	発行地・発行者・発行年不明	卷1-9 (9冊)	241.7/65_W/1-9
2_2			筆写本	発行地・発行者・発行年不明	卷1-9 (9冊)	241.7/288_W/1-9
3_1	大慧度経宗要	元曉	筆写本	発行地・発行者・明, 明治34年(1901)写	不分巻 (1冊)	241.2/203_W
3_2			筆写本	発行地・発行者・発行年不明	不分巻 (1冊)	241.2/24_W
4	無量寿経宗要	元曉	木版本	発行地不明, 松本屋清兵衛蔵版, 寶永8年(1711)刻	不分巻 (1冊)	241.5/317_W 241.5/430_W 241.5/28_W 024.92/190_W
5	仏説阿弥陀経疏	元曉	木版本	発行地不明, 中井東右衛門鋳梓, 1699年後序	不分巻 (1冊)	241.5/175_W 241.5/434_W
6-7	遊心安楽道/仏説阿弥陀経疏	元曉	木版本	京都, 西村九郎右衛門, 明暦4年(1658)跋	2巻 (1冊)	268.1/228_W 268.1/134_W
8_1	大乘起信論別記	元曉	木版本	発行地不明, 吉田庄丈衛門, 萬治二歳(1659)刻	卷本-末 (1冊)	243.6/103_W 243.6/102_W 243.6/191_W 024.92/246_W/1-2
8_2			木版本	京都, 丁子屋九郎右衛門, 出雲寺文次郎, 池田屋七兵衛, 萬治2年(1659)原版, 天明元年(1781)再刻	卷本-末 (1冊)	243.6/154_W
9	大乘起信論疏	元曉	木版本	発行地不明, 大角清兵衛, 井上忠兵衛, 元禄9年 (1696)刻	卷上-下 (2冊)	024.92/249_W/1-2 243.6/68_W/1-2 243.6/153_W

龍谷大学所蔵の韓国撰述仏書の文献的意味

種数	書名	撰者	版事項	発行事項	巻事項	龍谷大学請求番号
10_1	無量寿経連義述 文贊	憬興	木版本	京都、帝畿書肆井上忠兵衛 蔵版、 元禄12年(1699)刻	卷上中下 (3冊)	241.5/41_W/1-3
10_2			筆写本	発行地・発行者・発行年不 明	卷上	241.5/277_W
11	菩薩戒本疏	義寂	木版本	京都、佐野伊兵衛 [等]、 貞享元年(1684)跋	卷上-下 (3冊)	242.4/25_W/1-3
12	海印三昧論	明鼎	筆写本	発行地・発行者不明、 [永久元年(1113)]	卷1 (1冊)	263.4/2_W
13	梵網經述記	勝莊	木版本	京城、林重義蔵版、 正徳4年(1714)刻	卷上-下 (4冊)	242.4/52_W/1-4
14	華嚴經文義要決 問答	表員	筆写本	発行地・発行者・発行年不 明	卷1-4 (2冊)	263.2/26_W/1-2
15_1	梵網經古迹記	太賢	木版本	発行地不明、村上、 寛文8年(1668)刻	卷上 (2冊)	242.4/32_W/1-2
15_2			木版本	発行地不明、銅駝坊書林村 上勘兵衛長尾平兵衛、 元禄2年(1689)刻	卷乾-坤 (2冊)	242.4/48_W/1-2
15_3			木版本	東京、大村屋總兵衛 [等]、 明治16年(1883)後序	卷乾-坤 (2冊)	024.92/219_W/1-2
15_4			木版本	京都、福森兵左衛門、 延寶5年(1677)刻	卷下本-末 (2冊)	242.4/34_W/1-2
15_5			木版本	京都、堀井傳右衛門、 延寶6年(1678)刻	卷下本-末 (4冊)	242.4/35_W/1-4 242.4/36_W/1-4
15_6			木版本	京都、藤井文政堂山城屋佐 兵衛、発行年不明	卷下本-末 (4冊)	242.4/33_W/1-4
16	本願業師經古迹	太賢	木版本	発行地・発行者・発行年不 明	卷上-下 (1冊)	241.7/167_W
17_1	成唯識論学記	太賢	筆写本	発行地不発行者不発行年不 明	卷上-下 (8冊)	243.4/344_W/1-8
17_2			筆写本	発行地不発行者不発行年不 明	卷上-下 (8冊)	243.4/37_W/1-8
18	法蔵和尚伝	崔致遠	木版本	発行地不発行者不明、 大安8年(1092)刻、 元禄12年(1699)刷	不分巻 (1冊)	024.1/78_W 296.4/149_W

上の17種の内、『解深密経疏』、『大慧度経宗要』、『成唯識論学記』は筆写本が各2件、『大乘起信論別記』は木版本が2件、『無量寿経連義述文贊』は木版本と筆写本の各1件である。『遊心安楽道/仏説阿弥陀経疏』の2種は1冊として束ねてあり、『梵網經古迹記』はそれぞれ時代が異なる木版本上巻と下巻が3件ずつ所蔵されている。これを総合的に見たならば、総18種28

件（木版本18件、筆写本10件）の新羅時代著述仏書が龍谷大学図書館に所蔵されていることになる。

高麗時代撰述仏書の内、現存している約60余種の内、5種が日本にのみ伝来しているが、この内、1種が龍谷大学に所蔵されている。そして筆者は龍谷大学図書館において高麗時代撰述仏書3種をさらに発見したが、その内の2種は陝川海印寺所蔵の木版を印出したもので、1種は日本版本であった。これらの文献も、やはり珍しく、貴重な本であるため、重要な研究資料だと言える。先にその目録を提示すると、次の通りである。

種数	書名	著譯者	版事項	発行事項	巻事項	龍谷大学請求番号
1	円宗文類	義天	筆写本	発行地・発行者・発行年不明	巻22(1冊)	214/1_W
2	大覚国師文集	義天	木版本	韓国の陝川海印寺，発行者不明，12世紀刻，大正11年(1922)刷	1冊	024.1/285_W
				韓国の陝川海印寺，発行者不明，12世紀刻，20世紀刷		205.1/66_W
3	大覚国師外集	義天	木版本	韓国の陝川海印寺，発行者不明，12世紀刻，20世紀刷	1冊	205.1/67_W
4	法華靈驗伝	了円	木版本	発行地不明，西田庄兵衛，慶安3年(1650)刻	巻上-巻下(1冊)	296.4/59_W

上の目録の内、『円宗文類』は韓国に伝来されておらず、日本にのみ伝来している本である。この本は総22巻の内、巻1、巻14、巻22のみ現存しており、残りは伝わっていない。『大覚国師文集』と『大覚国師外集』は海印寺蔵経閣に所蔵されている木版を1922年に大屋徳成が印出してきたものである。これについては、次章で取り扱う。そして『法華靈驗伝』は高麗末の僧侶である了円が法華信仰の靈驗を集めて、編纂した本であるが、どのような経路を通して日本に伝来したかは分かっていない。

朝鮮時代撰述仏書は1種のみ、龍谷大学図書館に所蔵されている。朝鮮時代仏教撰述の場合、韓国においても継続して新しい資料等が発見されている状況なため、全文献の種類と数を限定することは難しい。龍谷大学図書館所蔵の『禪家龜鑑』は朝鮮時代に、次々に刊行され韓国においてもいくつかの版本が存在しているため、珍しく、貴重な本と見ることは難しいが、日本において刊行され伝来している点には意義がある。簡単な書誌情報を表示すると次の通りである。

種数	書名	著譯者	版事項	発行事項	巻事項	龍谷大学請求番号
1_1	禪家龜鑑	休静	木版本	発行地不明，吉野屋想兵衛版，延宝5年(1677)	巻本-末(2冊)	267.2/54_W/1-2 267.2/53_W/1-2
1_2			木版本	京都，村上平樂寺，延宝6年(1678)	不分巻(2冊)	267.2/83_W/1-2

休静（1520-1604）は、朝鮮時代仏教界で最も偉大な師として評価されている僧侶であり、彼の著書『禪家龜鑑』は朝鮮僧侶達にとって、必読書であったと言える。この本がどのような経路を通して、日本に伝来されたのかは明らかにされていないが、休静が文禄・慶長の役当時、朝鮮義僧軍を率いた禪教都総摂であったことから、文禄・慶長の役時期に伝来したことが推定される。

以上の龍谷大学所蔵韓国撰述仏書の刊写本を時期と版種別に区分してみると、次の通りである。

時 期	新羅撰述佛書		高麗撰述佛書		朝鮮撰述佛書	
	木版本	筆写本	木版本	筆写本	木版本	筆写本
11世紀	1 (1)	—	—	—	—	—
12世紀	—	—	2 (2)	—	—	—
17世紀	8 (11)	—	1 (1)	—	1 (2)	—
18世紀	3 (3)	1 (1)	—	—	—	—
19世紀	1 (1)	—	—	—	—	—
20世紀	—	1 (1)	—	—	—	—
未 詳	2 (2)	6 (8)	—	1 (1)	—	—
合 計	15(18)	8 (10)	3 (3)	1 (1)	1 (2)	0

*種数を表し、()の中に件数を表示した。

上の表から、総合計は28種34件となる。前の表では新羅時代18種28件、高麗時代4種4件、朝鮮時代1種2件の総23種34件であったが、改めて28種34件と整理したのは、『梵網經古迹記』が、各巻の時代別板刻時期が異なり、重複計算されていたためである。上の表から分かるように、現存している龍谷大学所蔵韓国撰述仏書は新羅時代撰述仏書が最も多く、その中でも17世紀の木版本が多い。特に太賢の『梵網經古迹記』に対する日本僧侶の註釈書が多く見られることが特徴であり、龍谷大学図書館に所蔵されている中で、木版本として印出された目録は次の通りである。

書 名	著譯者	発行事項	巻事項	龍谷大学請求番号
梵網經古迹科本	著者未詳	発行地不明、中野氏は誰刊、慶安3(1650)	巻下本-末(2冊)	242.4/31_W/1-2
梵網經古迹記撮要	新羅青丘沙門太賢古迹；日東雙丘沙門洞空撮要；門人蓮盛分會	京都、大和屋伊兵衛、貞享3(1686)跋	巻1-6(6冊)	242.4/44_W/1-6
梵網經古迹記撮要	太賢 集；洞空 錄	洛陽、大和屋伊兵衛、貞享3(1686)	巻1-6(6冊)	242.4/43_W/1-6

梵網經古述記科解	太賢述記；觀尊科解； 慈光校讎	洛陽，文壹屋宇平， 元祿 3 (1690) 序	卷下本-末 (2 冊)	024.92/215_w/1-2
梵網經古述記撮要 纂釈	太賢 集；洞空 集記	京都，大和屋伊兵衛， 元祿12(1699)	卷上中下 (3 冊)	242.4/47_W/1-3
梵網古述折衷	太賢 集；養存 補	発行者不明， 元祿15(1702)偈	卷1-5 (全5巻4冊)	242.4/71_W/1-4
梵網經古蹟記資講 鈔	通玄 述	大坂浅野弥兵衛重光， 正徳 6 (1716)	卷1-10 (全10巻5冊)	242.4/39_W/1-5

上のこれらの註釈書が17世紀後半に 5 件、18世紀前半に 2 件が刊行された点を見ると、17世紀後半から18世紀前半に太賢の『梵網經古述記』に対する関心が増加したことが分かる。

3. 韓国撰述仏書の書誌的価値

『仁王經疏』と『解深密經疏』は円測（613-696）の著述である。円測は新羅で生まれたが、幼い時から中国に渡り、そこで一生を終えた卓越した唯識学者であった。彼は玄奘（602-664）の弟子になり、新唯識を学び、西明学派を始めたことから、窺基（632-682）の慈恩学派と合わせて法相宗の両大山脈を築き上げた。著述として『仁王經疏』、『般若心經贊』、『解深密經疏』、『無量義經疏』、『百法論疏』、『二十唯識論疏』、『成唯識論疏』、『六十二見章』、『阿弥陀經疏』、『観所縁縁論疏』、『広百論疏』、『大因明論記』等があったと言う⁴⁾。正倉院文書によると、奈良時代にはすでに円測の著述の大部分が筆写された跡が見られるが⁵⁾、現在にも伝わっているものは『仁王經疏』、『般若心經贊』、『解深密經疏』、『無量義經疏⁶⁾』の 4 種である。この内、『仁王經疏』と『解深密經疏』が筆写本として龍谷大学図書館に伝えられている。『仁王經疏』は 4 冊で構成されているが、巻上末の巻尾に“元文二年四月廿一日於雨中閑居交點了 點本云天喜三年八月十二日辰時點已 長講會 講師明範院 聽衆僧經讀 招提寺五室宗祐 宝永元年九月日書寫之 如幻慧嚴 延享改元申子六月廿二日澠署如蒸 拜寫了 願生生遊般若波羅蜜海者也”と筆写されている。この筆写記は大谷大学所蔵本を底本にしており、平安時代写宝寿院蔵本を甲本にして作られた大正新脩大蔵經第33巻に収録されている『仁王經疏』の記録と一致することから、龍谷大学図書館所蔵本もやはり同じ系統の筆写本だと言える。『解深密經疏』は 2 件各 9 巻の筆写本があるが、共通していることとして巻 9 末の巻尾に、“經文未竟宜有次疏惜哉此本慳”于第九巻後學須尋而全備焉”と筆写されている。以上、龍谷大学図書館に所蔵されている円測の 2 つの著書は京都大学と大谷大学等にも筆写本が伝わっているが、どれが模本なのか明らかにされていない。

『大慧度經宗要』、『無量寿經宗要』、『遊心安樂道⁷⁾』、『仏説阿弥陀經疏』、『大乘起信論別記』、『大乘起信論疏』は元曉（617-686）の著述である。彼は義湘（625-702）と共に新羅時代

仏教において最も偉大な僧侶として評価されている。中国に遊学することはなかったが、学問的水準は中国の僧侶達と対等であり、むしろ彼の著述が中国に渡り多くの影響を与えた程である。元暁の著述は日本にも伝えられ、新羅時代僧侶の中でも、一番多くの文献が現在にまで伝来されており、彼の著述として知られる約80余種類の内、『大慧度経宗要』、『法華経宗要』、『華嚴経疏』巻3、『瓔珞本業経疏』巻下、『涅槃経宗要』、『弥勒上生経宗要』、『解深密経疏』序文、『無量寿経宗要』、『仏説阿弥陀経疏』、『遊心安楽道』、『菩薩戒本持犯要記』、『梵網経菩薩戒本私記』巻上、『金剛三昧経論』、『大乘起信論別記』、『大乘起信論疏』、『二障義』、『判比量論』、『中辺分別論疏』巻3、『十門和諍論』断片、『発心修行章』、『大乘六情懺悔』、『弥陀證性偈』、等は現存している⁸⁾。この内、『解深密経疏』序文、『金剛三昧経論』、『十門和諍論』、『発心修行章』、『弥陀證性偈』等を除外して、計17種が日本に伝来されているが、龍谷大学図書館には6種が所蔵されている。龍谷大学に所蔵されている6種の内、木版本で『大乘起信論別記』、『大乘起信論疏』、『無量寿経宗要』、『仏説阿弥陀経疏』、『遊心安楽道』があり、筆写本で『大慧度経宗要』がある。木版本は17-18世紀に刊行されて、筆写本は20世紀初に作られたものと発行年未詳のものがある。木版本の場合は、筆写され伝来しているものが、いつ頃から板刻されたのか、系統を検討する必要がある、筆写され伝来しているものを集めて、分析する必要がある。

『無量寿経連義述文贊』を著述した憬興（7世紀）は、元暁、太賢と合わせて新羅時代の3代著述家として知られている。『東域伝燈目録』、『新編諸宗教蔵総録』、『注進法相宗章疏』、『法相宗章疏』等の目録を見ただけでも、唯識関連17種、浄土関連12種、涅槃経関連4種等の40種を超える多くの著述を残したことが分かるが、現在にも伝わっているものは『無量寿経連義述文贊』、『三弥勒経疏』、『金光明最勝王経略贊』のみである⁹⁾。この内、龍谷大学図書館には木版本と筆写本の『無量寿経連義述文贊』が所蔵されている。木版本は上中下巻が全て揃っているが、筆写本は上巻のみある。筆写本は9行18字51張で構成されており筆写時期と系統は分かっていない。しかし木版本と対校して文字の変化を調査してみたら、木版本の模本を筆写したのか、それとも別の系統を筆写したのかを推定することできるはずだ。

『菩薩戒本疏』を著述した義寂（7-8世紀）は、義湘の十大弟子の一人として知られているが、生没年代についての解釈がいくつかあり、事実を把握することは難しい¹⁰⁾。彼の著述に、約20種があったことを推定できるが、『菩薩戒本疏』、『法華経集驗記』が完全な形態で残っている。そして『法華経論述記』は2巻中、上巻のみ残っており、『無量寿経述記』は3巻中、第1巻が復元された¹¹⁾。龍谷大学図書館には、1684年に刊行された木版本『菩薩戒本疏』が所蔵されているが、この本が10行20字の明朝体で板刻されていることから、17世紀に中国から伝来された萬曆版大蔵経の形式に影響を受けて刊行されたことが考えられる。

『海印三昧論』を著述した明晶（7-8世紀）は700年頃、北インドの僧李無詔に『不空罽索陀羅尼經』の翻訳を要請した明暁と同一人物であると推定されているが¹²⁾、彼のその他の著述

は知られていない。『海印三昧論』は卍統蔵經第二編套四冊に収録されているが、龍谷大学図書館所蔵本とは少し違いがある。龍谷大学図書館所蔵本は、海印三昧図に続きすぐに、“論曰此法門者”と始まり、末尾には“永久元年癸巳八月廿日書寫了筆生助範”とあり、続いて、“已下偈頌七言廿八句私爲易讀直書添言”といった後に、別に海印三昧論頌を筆写しているが、卍統蔵經に収録されているものは、海印三昧図に続いて、海印三昧論頌を載せた後に“論曰此法門者”で始まり、末尾に“永久元年……助範”、その次に、“享保六年三月以城乾高山寺藏本對校”とあり、別途に海印三昧論頌を載せなかった。すなわち龍谷大学図書館所蔵本が模本としたものは、1113年（永久1）に筆写されたものであり、末尾に筆写者が本文中の図印を読むことが難しいため、簡単に読めるように附録として海印三昧論頌を筆写したことが分かる。そして卍統蔵經に収録された『海印三昧論』は、1721年（享保6）に高山寺にあった筆写本を対校して載せたものだと考えられる。

『梵網經述記』を著述した勝莊（8世紀初）は、円測の弟子でありながら、唐の義浄が703年に東都の福先寺と西京の西明寺で、『金剛明最勝王經』、『能断金剛般若經』、『弥勒成仏經』、『百一羯磨』、『六門教授論』等、經律論20部115巻を翻譯・註釈をする時に、證義を任されたほどの高僧であった¹³⁾。著述には『金剛明最勝王經疏』、『梵網經述記』、『成唯識論決』、『雜集論疏』、『仏性論義』、『大因明論述記』、『起信論問答』等があったという。この中、龍谷大学図書館に所蔵されている『梵網經述記』が現在にも伝わっており、1960年代に安啓賢により『金光明最勝王經疏』の輯逸本¹⁴⁾が作られたこともあった。現存している『梵網經述記』は筆写、伝来されてから1714年に刊行されたように見えるが、10行20字の明朝体で板刻されたと見たならば、この本もやはり17世紀に中国から伝来された萬曆版大蔵經の形式に影響を受けたものと考えられる。

『華嚴經文義要決問答』を著述した表員（8世紀）は、新羅の皇龍寺僧侶という記録以外には、他の資料がなく、詳しいことを知ることができない。これまで明かされた『華嚴經文義要決問答』の筆写本は佐藤達次郎旧蔵本、延暦寺所蔵本、東大寺四聖蔵本、龍谷大学所蔵本、京都大学所蔵本、東大寺松原文庫本等がある¹⁵⁾。龍谷大学図書館所蔵本1面の白文長楕円印に“正徳四甲午”という文字が押してあるが、正徳4年（1714）に筆写をしたということなのか、それともこの時に所蔵を開始したという意味なのか、不確定である。

『梵網經古述記』、『本願薬師經古述』、『成唯識論学記』を著述した太賢（8世紀）は、元曉、憬興と合わせて新羅時代3代著述家として知られている。因明関連20種、唯識関連17種、信仰関連8種等、50余種の中で、現存している著述は『梵網經古述記』、『菩薩戒本宗要』、『本願薬師經古述』、『成唯識論学記』、『起信論内義略探記』の5種にしかすぎない¹⁶⁾。その中龍谷大学図書館に木版版として『梵網經古述記』と『本願薬師經古述』、筆写本として『成唯識論学記』が所蔵されている。『梵網經古述記』は上巻と下巻の発行年代が互いに違うが、合わせると完本になる。前章で論じたように、この本の註釈書が17-18世紀日本において、多数刊行された

ことから、当時戒律に対する関心が増加していたことを推察することができる。『本願薬師經古迹』は、木版本で発行事項が明らかではない。唐と新羅において叙述された薬師經註釈書等があったと言うが、完璧に残っているものは、太賢のものしかなく、同時代日本の善珠(724-797)の『薬師經疏』が伝来されており、対比する¹⁷⁾。『成唯識論学記』は8冊の筆写本が2件あるが、そのすべての発行事項が明らかにされておらず、10行20字で筆写されている。この本は『成唯識論』に対する、現存する唯一の韓国撰述註釈書であるため、当時の新羅唯識学の水準を表していることから大きな意味がある。

『法蔵和尚伝』を著述した崔致遠(857-?)は、新羅時代最高の儒学者として評価を受けている。著述の中に詩文集として、『桂苑筆耕』、『雜詩賦』、『中山覆櫃集』、『四六集』等があり、史書には『帝王年代曆』がある。仏教関連著述は、『浮石尊者伝』、『法蔵和尚伝』、『釈利貞伝』、『釈順応伝』、『普徳伝』、『四山碑銘』である。しかし現存しているのは、『桂苑筆耕』、『法蔵和尚伝』、『四山碑銘』のみであり、その他は『東文選』に残っている詩文や寺記等にその片鱗だけが伝えられている。周知のように法蔵(643-712)は、智儼(602-668)の弟子として新羅義湘と同門で学び、中国華嚴思想を集大成した人物として知られている。崔致遠が法蔵に対する伝記を著述した意図が何であったのかは明らかではないが、彼が海印寺にいた904年に著述¹⁸⁾したと見れば、当時海印寺が華嚴宗の寺刹であったことと無関係ではなかったと考えられる。

義天(1055-1101)は高麗文宗の4番目の子供であり、編著には『円宗文類』1部、『新編諸宗教蔵総録』、『釈苑詞林』1部、『成唯識論单科』、『八師經直釈』、『消災經直釈』、『三家義疏』等があったという。しかし、現在に伝わっているものは、『円宗文類』、『新編諸宗教蔵総録』、『釈苑詞林』、そして義天の文字を集めて編集した『大覚国師文集』と『大覚国師外集』である。その中の『円宗文類』、『新編諸宗教蔵総録』は日本のみに伝わっている。ところで、龍谷大学図書館所蔵本の『円宗文類』巻22の巻尾は“翰林院國書中臣李祐書”となっているが、卍統蔵經に収録されている『円宗文類』巻22には、そのような文句は見られず、巻尾に“南都東大寺古藏中多蠹損僅殘此一本。其餘尋之未得。惜哉。灑淚留焉。契空。或時契空淨業師。來訪余館而談單此事。仍約諾而領掌。頂戴歡喜不少。即命榮賢慈眼法師令摸寫焉。嘗寶永七年載次庚寅夷則九日 四聖坊法印晉性¹⁹⁾”となっている。すなわち卍統蔵經に収録されている原本は1710年に東大寺にあった筆写本を慈眼法師が模写したものであり、龍谷大学図書館所蔵本は東大寺にあったものと同時代、あるいはそれ以前に筆写されたと考えられる。そして翰林院は高麗時代に王命によって教書や制誥等を作成していた場所であるため、その場所の官吏が筆写したということは義天が王族であった点と、無関係ではないはずだ。

義天の文字を集めて編纂された『大覚国師文集』と『大覚国師外集』は海印寺に、その木版が残っている。龍谷大学図書館に所蔵されている『大覚国師文集』(024.1/285_W)は大正年間に大屋徳成が海印寺に行き、直接印出したもので、『大覚国師文集』の前張に次のように印

出経緯を筆写している。

大正十一年春通譯生金承法ラ伴ヒ朝鮮ヲ巡禮ス四月下旬夫餘、百濟ノ廢墟シ弔ヒ錦江ニ泛ヒテ大邱ニ還ル時ニ春雨蕭蕭トレテ聲レズ掩留數日廿五日晴ニ會ス乃チ料紙ツ負ヒ洛東江ツ渡リテ高靈ヘ往キ更ニ馬ニ跨リテ伽倻ノ山徑ツ越ユ時ニ春已老イ新綠谷ツ埋ソ李花淡クレテ夢ノ如リニ開ケリ黄昏山門ニ達レ滯留九日ニ及ビ日ス寺僧ニ屬レテ經板ヲ掲寫セレム新板ハ雜板庫中ニ獲ルトコロニレテ麗朝ノ雕造ニ係リ外集ト兩ナガラ不完ト雖モ貴ブ可レ寺ハ義天隱棲處青山背ラ回り碧流前ヘ臨ム眞ニ塵外ノ淨域懷古ノ情堪ス

現在海印寺に保管されている『大覚国師文集』の木版は欠失の部分がが多く、現存している版本の印出時期によって、欠落の度合いが異なる。そのため、研究者達は新しい木版や版本が発見されることを期待して待っているが、大屋徳成が1922年に印出したこの本は20世紀のものとしては一番古いものであるため、今後他の版本との対比を通して、落丁の加減を調査する必要がある。

『法華靈驗伝』を編纂した了円（14世紀）に対する資料はなく、詳細に知ることはできない。この本が『法華經』信仰を高揚するために編纂されたと見たならば、彼が天台宗の僧侶であったことを推察することができる。この本は高麗後期に水原萬義寺において初めて刊行されたが、現在は残っておらず、1534年（中宗29）に高敞文殊寺で刊行されたものが一番古い版本になる。また1544年（中宗39）に安辺釈王寺において、1652年（孝宗3）には宝城開興寺において刊行されたものが現在にも伝わっている²⁰⁾。龍谷大学図書館所蔵本は1650年に板刻されたものであり、萬義寺本、文殊寺本、釈王寺本の中の 하나가底本になり、日本において刊行されたことが考えられる。

『禪家龜鑑』を著述した休静（1520-1604）は文禄・慶長の役以前からすでに僧家の指導者として評価を受けており、戦争が勃発するや禪教都総摂に任命され、義僧軍を集めて戦場にも直接出たことから、朝鮮後期に僧俗を問わず、最も尊敬を受けた僧侶となった。休静は『禪經釈』、『禪經訣』、『心法要抄』、『三家龜鑑』、『説禪儀』、『雲水壇歌詞』等を著述し、彼の文字等を集めて弟子達が『清虚堂集』を編纂した。これらの本はすべて現存しており、『禪家龜鑑』は11種の異版がある²¹⁾。そのため日本で刊行された『禪家龜鑑』に対しては、特別な意味を持つことが見出すことができなかった。しかし、どのような経路でこの本が日本に伝えられ、どのような影響を与えたのかは研究をする必要があると考えられる。

4. 終わりに

これまで龍谷大学図書館所蔵の韓国撰述仏書の種類と価値について論じた。これを通して、

現在にも伝わっている新羅時代撰述仏書54種中の46種、高麗時代撰述仏書5種が、日本にのみ伝来されている事実を確認し、その中の新羅時代撰述仏書18種と高麗時代撰述仏書1種が龍谷大学図書館に所蔵されていることが分かった。それだけでなく、日本で発行された高麗時代撰述仏書1種と朝鮮時代撰述仏書1種、そして20世紀初めに韓国で印出された高麗時代撰述仏書2種を確認することができた。これらの文献の多くは、旧統藏經や大正新脩大藏經、そして『韓国仏教全書』に収録されているが、前近代期に発行された原本であったという点から、書誌的研究価値が高いと言える。

それにも関わらず、前近代期に発行された韓国撰述仏書の原本に対する総合的検討が成されていない状況である。幸いにも筆者は2013年に龍谷大学図書館所蔵韓国撰述仏書を調査することができ、本稿においてそれに対する総合的書誌事項を取り扱った。今回の論文を始まりとして、日本全域にある学校及び、寺刹図書館を調査して、韓国撰述仏書の全貌を把握することができたならば、日本所在の韓国撰述仏書研究のみならず、韓国仏教研究、さらに進んで日本仏教研究の助けにもなるはずだ。

- * This work was supported by the National Research Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government (NRF-2007-361-AM0015).

註

- 1) 新羅時代撰述仏書54種とその中の日本伝来仏書の現状は『韓国仏教全書』を参考にしてほしい。
- 2) 日本にのみ残っている、高麗時代文献は義天の『円宗文類』と『新編諸宗教蔵総録』、知訥の『華嚴論節要』、慧湛の『無衣子詩集』、一然の『重編曹洞五位』である。
- 3) 龍谷大学所蔵の17種の内、木版本は日本の他の機関にも所蔵されているため、龍谷大学のみにも所蔵されていると見ることはできない。しかし筆写本は影印していない限り、唯一のものであると言える。
- 4) 東国大学校仏教文化研究所編『韓国撰述文献目録』、東国大学校出版部、1976年、pp. 9-13。
- 5) 金天鶴「日本仏教의 円測에 대한 認識-奈良시대를 中心으로」『韓国思想史学』36、韓国思想史学会、2010年12月、pp. 79-109。
- 6) 平了照は天台宗全書第19巻に収録されている憐昭記『無量義經疏』3巻が、実は円測の『無量義經疏』3巻を筆写したものであったと、1964年に発表をしたことがある。(平了照「四祖門下憐昭記『無量義經疏』について」、福井康順編『慈覺大師研究』、天台学会発行、1964年4月、pp.423-438。)最近、桶川智昭は平了照の見解をさらに発展させて、唯識学的立場から見ても、円測の撰述ということが確実だと主張した。(桶川智昭「円測新資料・完本『無量義經疏』とその思想」『仏教学 REVIEW』4、金剛大学校仏教文化研究所、2008年、pp.67-108。)
- 7) 『遊心安樂道』は早くから松林(源)弘之が元曉の著述ではないと言及したことがあり(源弘之「朝鮮浄土教の研究」『龍谷大学仏教文化研究紀要』16、1977年、p. 82。)以後殆どの研究者達がこの見解を受容している。しかしこの本を新羅撰述仏書と見る見解があるため(源弘之「新羅浄土教の特色」、金知見・蔡印幻共編『新羅仏教研究』山喜房仏書林、1973年、p. 315。；高翊晋「遊心安樂道의 成立과 그 背景」『仏教学報』13、東国大仏教文化研究所、1976年、pp.153-170。)本考では一旦、元曉の著述文献として扱うとする。
- 8) 東国大学校仏教文化研究所編『韓国撰述文献目録』、東国大学校出版部、1976年、pp. 16-37。
- 9) 金亮淳『懷興의 無量壽經連義述文贊 研究』韓国学中央研究院博士論文、2008年9月、pp. 7-16。

- 10) 崔鉉植「義寂 研究의 現状과 課題」『東国史学』56、2014年、pp. 1-36。
- 11) 『無量寿經述記』は1940年に春日礼智が初めて、輯逸本を編纂して、1958年に恵谷隆戒が新しい復元本を作っており、最近、南宏信が身延山大学で3巻中、第1巻を発見し復元した。(国際仏教大学院大学日本古写経研究所『玄一撰 無量寿經記・義寂撰 無量寿經述記』、日本古写経善本叢刊第五輯、2013年。)
- 12) 『開元釈教録』巻9 (CBETA, T55, no.2154, p. 566, b18-24)；金相鉉「明鼎의 海印三昧論」『新羅의 思想과 文化』、一志社、1999年、pp. 354-377。
- 13) 「唐京兆大薦福寺義浄伝」、『宋高僧伝』巻1 (CBETA, T50, no. 2061, p. 710, b24-c3)。
- 14) 安啓賢「勝莊撰 金光明最勝王經疏(輯逸)」『仏教学報』、2-4輯、1964-1966年。
- 15) 金星周「『華嚴經文義要決問答』古写本의 比較研究」『仏教学 REVIEW』7、金剛大学校仏教文化研究所、2010年、pp. 179-214。)
- 16) 朴仁錫訳『大乘起信論内義略探記』、東国大学校出版部、2011年、pp. 7-9。
- 17) 鄭炳三「新羅 藥師信仰의 性格：教理的解釈과 信仰活動」『仏教学研究』39、仏教学研究會、2013年、pp. 57-88。
- 18) 『唐大薦福寺故寺主翻經大德法藏和尚伝』巻1；「于時天復四春。枝幹俱首。於尸羅國迦耶山海印寺華嚴院避寇養病。兩偷其便」(CBETA, T50, no. 2054, p. 285, c27-28)
- 19) 『円宗文類』巻22 (CBETA, X58, no. 1015, p. 567, c4-10// Z 2 : 8, p. 431, a3-9 // R103, p. 861, a3-9)
- 20) 具美真「法華靈驗伝의 敘事文学的 特性 研究」ソウル大学校碩士論文、2012年、pp. 7。
- 21) 宋日基「三家龜鑑의 書誌学的 研究」中央大学校博士論文、1991年、pp. 55-71。